

遅れに対する態度と実際の遅れ生起との関連

心理学科 川上正浩

抄録：本研究では、授業時間内に認められる遅刻生起頻度と、個人の遅れに対する態度、主観的遅れ生起頻度、楽観性との関連が検討された。心理学科一回生春期配当の必修授業が調査対象授業として設定された。103名の調査参加者を対象に、当該授業の最初の回に、個人の遅れに対する態度（VODKA2005）、主観的遅れ生起頻度、楽観性（MOAI-4）が質問紙調査により測定された。また、全8回の授業を通じて、各調査対象者の遅刻および欠席状況が記録された。授業終了後、授業場面で生起する遅刻、欠席の頻度あるいは時間と、個人の遅れに対する態度、主観的遅れ生起頻度、楽観性との関連が吟味された。相関係数に基づく分析の結果、授業場面における遅刻、欠席の生起頻度は、自分の遅れに対する罪悪感と関連することが示された。

索引語：遅刻 態度 遅刻生起頻度 VODKA2005 楽観性

問題と目的

日常生活の中で我々が何らかの課題を遂行する際には、その遂行に期限が設定されていることが多い。たとえば大学生の生活においても、レポートを提出する、電車の発車時間に間に合うように駅に着く、授業開始時間までに教室に到着する、といった形で、日にち単位、あるいは時間単位で期限の設定されている課題が多く認められる。本研究では川上・川野（1992）に倣い、期限の設定されている課題を期限付き課題と呼び、論を進める。

期限付き課題の遂行に際して、その課題遂行は、常に完璧になされるわけではなく、時として課題遂行に遅れが認められたり、あるいは場合によってはその遅れにより課題遂行そのものが不可能になったりしてしまう。本研究では、期限付き課題遂行時に認められる遅れ（いわゆる遅刻）に焦点を当て、その認知心理学的なメカニズムに着目して、遅れ生起のプロセスを検討する。

日常場面でのこうした期限付き課題の遂行過程において、我々は期限内に課題を遂行するための

予定を立て、それに基づいて行動を制御する。川上・川野（1992）は、大学生にとって一般的な期限付き課題であると見なされる課題としてレポート提出を取り上げ、質問紙を用いてレポート課題を提出するまでの過程を分析した。その結果、課題を知らされた、つまりレポート課題が呈示された最初の段階での、当該課題に対する認知と、レポート課題の提出、つまり期限付き課題の遂行との間の関連性が示唆された。さらに川野・川上（1993）は、川上・川野（1992）のデータを、特に調査参加者の報告した“予定をシフトさせた理由”を手がかりに再分析し、課題に対する認知そのものが遅れ生起に影響を及ぼしていることを示した。

課題の要因、より正確には課題に対する認知が遅れ生起に影響を与える一方で、個人が示す遅れ行動に対する態度も遅れ生起に影響を与えることが予想される。川上・安藤（2001）は、川上・川野（1994）、川野・川上（1995）によって収集され分析された自由記述データに基づいて、遅れに対する態度尺度（View on Delay by Kawakami and Ando：VODKA、50項目、5段階評定）を

作成し、遅れに対する態度を構成する下位概念について検討した。その結果、“自分の遅れに対する罪悪感”“他者の遅れに対する非難”“遅れの自己責任性”といった VODKA を構成する 3 つの下位尺度が抽出され、これらの信頼性が確認された。

安藤・川上 (2001) では、川上・安藤 (2001) の分析を受け、VODKA によって測定される遅れに対する態度と調査参加者が実際に示す遅れの頻度との関係について、また安藤・川上 (2002) では、遅れに対する態度 (VODKA) と楽観性との関連について検討が加えられた。その結果、男性は他者の遅れを非難する人ほど公的な遅れが少ない傾向にあるが、女性にはそのような傾向が見られないことが示された。また男女を問わず、他者の遅れをより非難する人は私的な遅れが少ない傾向にあること、遅れの自己責任性を高く認知している人は、私的な遅れをしやすいことが示された。遅れの自己責任性については、公的遅れとの間には有意な相関は示されていない。これらの結果は、遅れの自己責任性が、公的遅れと私的遅れに対する異なる態度を説明することを示している。

また、遅れに対する態度 (VODKA) と楽観性との関連については、VODKA と MOAI-4 の間の相関分析によって“自分の遅れに対する罪悪感”、“他者の遅れに対する非難”と MOAI-4 との間には負の相関が、“遅れの自己責任性”とは正の相関が示された。すなわち、楽観的な人は遅れに対してあまり否定的な態度をもっておらず、自己責任を重視する傾向にあることが示されたといえる。また、楽観性の下位尺度の中でも、“割り切りやすさ”との相関が比較的高い値を示していた。“割り切りやすさ”は、否定的な出来事に対してこだわったり、思い悩んだりしないことを意味する。すなわち、“割り切りやすさ”の高い人は、遅れに対してもその否定的な影響を低く見積もっているために、“自分の遅れに対する罪悪感”“他者の遅れに対する非難”得点が低くなっ

たのであろう。

これに対して、VODKA と“運の強さ”との相関は認められなかった。これは、遅れが運のように統制不可能な要因に規定されるのではないかと捉えられているためではないかと考えられる。

さらに川上・安藤 (2002) は、さまざまな状況で立てられる予定がどのように異なるのかを検討するために“電車の時間に間に合うように駅に着く”という期限付き課題を設定し、何時何分に家を出るのかの予定時刻の報告を求めた。さらに、この予定時刻設定の根拠として回答している自由記述データを分析した安藤・川上 (2004, 2005)、川上・安藤 (2005) では、調査参加者の課題遂行に対する見積もり、プランニングを検討し、“バスに乗り遅れた場合を予想”など、課題内では明示的ではないが実際の課題遂行に際して必要となるであろう時間を考慮することに言及する記述、プランニングの段階でどのような意識で“余裕”の時間を組み入れるかに関する記述、自己の普段の行動パターンに基づいてプランニングを行っていることに言及する記述、待つことや遅れることに対するネガティブさに言及した記述、5分、10分といったキリの良い時間に設定し直すことに言及する記述、無根拠な楽観的予想などが、その予定時刻設定の根拠として挙げられていることを示された。

しかしながら、過去の研究においては、遅れに対する態度、遅れの生起頻度などは、すべて質問紙によって測定されたり、仮想的な課題に予定を立てる、といった形でデータ収集がなされたりしており、実際の課題遂行においてどの程度遅れが認められるか、といった“実測的な”データとの関連については未だ検討されていない。

そこで本研究では実際の遅れの生起頻度の尺度として、授業における遅刻を実測し、実際に認められる遅れの生起頻度と、遅れに対する態度やその他の個人属性、具体的には楽観性との関連について検討を行う。

本研究では、筆者が担当する授業内での遅刻に限定したうえで、この生起頻度を把握し、この実際の遅刻頻度と、質問紙によって測定される個人の遅れに対する態度や楽観性との関連について吟味を行う。

本研究の目的は、質問紙によって測定される遅れに対する態度やその他の個人属性、具体的には楽観性と、実際の授業場面で認められる遅刻頻度との関連について検討することである。そのため、まず質問紙調査を実施し、個人の遅れに対する態度、楽観性、主観的な遅れ生起頻度について調査する。この際、個人の遅れに対する態度測定には、安藤・川上 (2006) の開発による VODKA (View on Delay by Kawakami and Ando) 2005 を用いる。VODKA2005 は、“自分の遅れに対する罪悪感”、“他者の遅れに対する非難”、“遅れの自己責任性”の3側面から、遅れに対する態度を測定する尺度である。

個人特性としての楽観性の測定には、中西・小平・安藤 (2001) の開発による MOAI-4 (Multidimensional Optimism Assessment Inventory) を用いる。MOAI-4 は“割り切りやすさ”、“肯定的期待”、“困難の不生起”、“運の強さ”の4つの側面から、楽観性を測定する尺度である。

さらに、本研究においては遅れの生起頻度についての自己評定 (川上・安藤, 2006) も質問紙によって測定しておく。

その上で、授業時間内で、どの程度の遅刻が生起するのかをカウントし、このデータを分析することにより、実測される遅刻生起頻度に上述の個人特性がいかなる影響を及ぼすのかを検討する。

方法

調査参加者

大学生 103 名が調査に参加した。調査参加者の平均年齢は 19.1 歳 ($SD=4.7$) であった (質問紙配付時)。

質問紙の構成

以下の3つの尺度からなる質問紙を作成した。

(1) VODKA2005 (安藤・川上, 2006)

遅れに対する態度を測定する尺度である VODKA2001 (安藤・川上, 2001) の改訂版である VODKA2005 を実施した。項目の改訂は、① 安藤・川上 (2004, 2005), 川上・安藤 (2005) で分析された、予定時刻課題 (「電車の時間に間に合うように駅に着く」という期限付き課題を想定し、いずれの時刻に家を出るかという予定を立てる課題) の自由記述データの内容に基づき新たな項目を付加、② 回答の分布が正規分布から大きく外れていると思われる項目を削除、③ ワーディングが不適切であると見なされた項目の表現を修正、という3点から項目の追加・削除・修正が行われたものである。結果、全 46 項目に対して5段階で回答を求めた。

(2) 主観的遅れ頻度尺度

川上・安藤 (2001) で作成された遅れ頻度尺度に、大学生を対象としていることを考慮し、特に授業場面に関する項目を追加した。本尺度は、さまざまな場面でのどの程度の遅れを経験しているかを問うものであり、全 20 項目に対して5段階評定で回答を求めた。なお、本尺度は、川上・安藤 (2006) においては“遅れ頻度尺度”と呼ばれているが、本研究においては、実際に生起した遅れ頻度との区別を明確にするために、“主観的遅れ頻度尺度”と呼んで論を進める。

(3) 多面的楽観性測定尺度 4 下位尺度版

(MOAI-4: 中西他, 2001)

中西ら (2001) において作成された MOAI-4 を実施した。楽観性の4つの下位尺度 (“割り切りやすさ”、“肯定的期待”、“運の強さ”、“困難の不生起”) に対してそれぞれ6項目ずつの、全 24 項目に対して5段階で回答を求めた。

実際の遅刻頻度の測定について

本研究では、以下の4つの基準を設定し、各調

査参加者の実際の遅刻頻度を定義した。

- a. 遅刻回数 全8回(試験を含む)の授業のうち、各調査参加者が遅刻した回数を“遅刻回数”とした。
- b. 遅刻・欠席回数 全8回(試験を含む)の授業のうち、各調査参加者が遅刻あるいは欠席した回数を“遅刻・欠席回数”とした。
- c. 遅刻時間 全8回(試験を含む)授業のうち、調査参加者が遅刻した回については、その遅刻時間を分単位で記録し、これらの合計時間(分)を“遅刻時間”とした。この際、欠席した授業については考慮の対象から除外した。
- d. 遅刻・欠席時間 全8回(試験を含む)授業のうち、調査参加者が遅刻した回については、その遅刻時間を分単位で記録し、また調査参加者が欠席した回については、授業の最後まで間に合わなかったと見なして、授業時間(180分)分の遅刻であると見なした。そのうえで、全ての回の遅刻時間を合計したものを“遅刻・欠席時間”とした。

手続き

本調査の対象として、平成18年度大阪樟蔭女子大学人間科学部心理学科の一回生配当必修科目である“心理統計法A”が設定された。

質問紙調査については対象授業の第一回目の授業時間内に集団形式で実施した。質問文と回答選択肢を講義用の教室前面に配置したスクリーンにプロジェクタで映写し、手元の回答用紙に回答に当たる数字を記入する形式でデータ収集を行った。

そして、全8回(試験を実施する最終授業を含む)の授業を通じて、各調査参加者の出欠状況、遅刻時間が記録された。

結果

VODKA2005の因子構造について

VODKA2005については、本研究において収

集したデータと、他の大学で収集したデータとを併せて因子分析を実施し、その因子構造を解明した。この結果については、安藤・川上(2006)として、東海心理学会第55回大会において報告した。したがってここでは、あらためて因子分析を実施せず、安藤・川上(2006)に基づく因子構造を採用した。安藤・川上(2006)においては、自分の遅れに対して悪いと思う態度である“自分の遅れに対する罪悪感”、他者の遅れを非難する態度である“他者の遅れに対する非難”、遅れ一般に対してその自己責任性を重視する態度である“遅れの自己責任性”の3つの因子が抽出されている。本研究では、安藤・川上(2006)に倣い、それぞれの因子に因子負荷量の高かった項目の平均評定値をもって、“自分の遅れに対する罪悪感”得点、“他者の遅れに対する非難”得点、“遅れの自己責任性”得点とした。Table 1に、それぞれの得点算出に用いた項目を示した。

主観的遅れ頻度尺度の因子構造について

川上・安藤(2006)は、本研究と同一の主観的遅れ頻度尺度に対して因子分析を行い、以下の3つの因子を抽出している。

第1因子は、テレビ番組を見逃すなど、個人的な予定において遅れることに関する項目が高い負荷を示していたため、“私的遅れ”因子と命名された。第2因子は、他者との待ち合わせや社会的な約束事に遅れることに関する項目が高い負荷を示しており、“公的遅れ”因子と命名された。第3因子は、授業に遅れるという項目の負荷が高かったため、“授業遅れ”と命名された。川上・安藤(2006)では、単一の因子にのみ.35以上の負荷を示す項目が下位尺度項目として採用されている。本研究でも、川上・安藤(2006)において採用された項目をそのまま採用し、私的遅れ、公的遅れ、授業遅れそれぞれの得点とした。Table 2に、それぞれの得点算出に用いた項目を示した。

Table 1 VODKA2005 の得点算出に用いられた項目一覧

質問項目
自分の遅れに対する罪悪感 (21項目) 遅れる自分に対して嫌になる。 自分が遅れると、気まずく感じる。 自分が遅れると、自責の念にとられる。 自分が遅れると、気をつけようと自己反省する。 自分が遅れると、まだまだ自分を甘やかしているのだと思う。 自分が遅れると気分が沈む。 遅れた時には、責められるかなど不安になる。 遅れることは、後の後悔につながると思う。 自分が相手を待たせるのは嫌だと思う。 相手を待っているとき、いろいろ考えて不安になる。 遅れることによって、相手との信頼関係にヒビが入ると思う。 自分が遅れることの方が、他人が遅れることより許せない。 遅れることは最終的には自分の損につながると思う。 遅れると、どうしたら良いのかわからなくなる。 遅れることで相手が不安になることが心配だ。 遅れることは相手に対して失礼なことだと思う。 待ち合わせなどで遅れるのは相手の時間を盗むことになると思う。 遅れてしまった場合には、仕方が無いと開き直ることができる。 親しくしている人との間では、遅れることに罪悪感を感じない。 自分が遅れた時にはどんな理由であろうと自分が悪いと思う。 予定がきちんと決まっていなくて落ち着かない。
他者の遅れに対する非難 (12項目) 待たされることが嫌いだ。 相手が遅れてくるとイライラしてしまう。 人を待つことは気にならない。 待つことが嫌いだ。 相手が遅れると、相手のルーズさにイヤ気がさす。 親しくしている人に待たされるのはいっこうに構わない。 相手が必ず来るとわかっていれば、待たされても構わない。 相手が遅れることに対しては寛容にしている。 遅れてしまう人の人間性を疑ってしまう。 人が遅れて来るのは根に持たない。 時間にルーズな人間は信用できないと思う。 遅れてしまう人は、間に合わせようという気がないのだと思う。
遅れの自己責任性 (4項目) 遅れることが、自分一人の問題ならば別に何とも思わない。 自分だけのことであれば、遅れても一向にかまわないと思う。 自分一人で決めた時間に遅れることは構わないと思う。 自分が遅れることによって被害を被るのが自分自身であれば問題はないと思う。

Table 2 主観的遅れ頻度尺度の得点算出に用いられた項目一覧

質問項目
公的遅れ (5項目) 先輩との待ち合わせに遅れること。 親しくしたい異性の友人との待ち合わせに遅れること。 仲間同士の飲み会に遅れること。 同性の友人との待ち合わせに遅れること。 家族との待ち合わせに遅れること。
私的遅れ (4項目) 行こうとしていた店の閉店時間に間に合わないこと。 見ようとしていた映画の開始時間に遅れること。 コンサートなど、イベントの開始時間に遅れること。 レンタルビデオの返却期間を過ぎてしまうこと。
授業 (4項目) 必修の授業に遅れること。 1限目の授業に遅れること。 2限目以降の授業に遅れること。 起きようとしていた時間に起きられないこと。

MOAI-4の因子構造について

川上・安藤(2006)は、MOAI-4の因子分析を行い、中西ら(2001)の尺度構成に基づく“割り切りやすさ”，“肯定的期待”，“困難の不生起”，“運の強さ”の4つの下位尺度を構成した。本研究では川上・安藤(2006)の因子分析に倣い、上述の4つの下位尺度得点を算出した。それぞれの得点算出に用いた項目をTable 3に示した。

VODKA2005, 主観的遅れ頻度尺度, MOAI-4のそれぞれの下位尺度得点の平均値および標準偏差をFigure 1に示した。

実際の遅れ生起頻度の集計

実際の遅れ生起頻度の4つの測度について、その平均値および標準偏差をTable 4に示した。

実際の遅れ生起頻度とVODKA2005との相関

遅刻回数, 遅刻・欠席回数, 遅刻時間, 遅刻・欠席時間の4つの測度とVODKA2005の3つの下位尺度との相関係数をそれぞれ算出した(Table

4) ところ, 有意な相関が認められたのは, 遅刻・欠席時間と自分の遅れに対する罪悪感($r=-.231, p<.05$)のみであり, 自分の遅れに対する罪悪感が高いほど, 遅刻・欠席時間が短いことが示された。他の組み合わせにおいては, 有意な相関は認められなかった。

実際の遅れ生起頻度と主観的遅れ頻度尺度との相関

遅刻回数, 遅刻・欠席回数, 遅刻時間, 遅刻・欠席時間の4つの測度と主観的遅れ頻度尺度の3つの下位尺度との相関係数をそれぞれ算出した(Table 4)。私的遅れと遅刻回数($r=.285, p<.01$), 遅刻・欠席回数($r=.288, p<.01$), 遅刻・欠席時間($r=.200, p<.05$)との間に有意な相関が認められた。また授業遅れとすべての遅れ生起尺度との間に有意な相関が認められた(遅刻回数: $r=.395$, 遅刻・欠席回数: $r=.457$, 遅刻時間: $r=.300$, 遅刻・欠席時間: $r=.419$, すべて $p<.01$)。公的遅れについては, 遅れ生起尺度との間

Table 3 MOAI-4の得点算出に用いられた項目一覧

質問項目
割り切りやすさ (6項目) 何事もあれこれ思い悩まない。 何か物事に失敗しても, しかたなかったと思ひあまり悩まない。 困ったことが起きても, 悩んでも仕方がないと思うのであまり気にしない。 人にしかられたときでも, くよくよしない。 失敗しても, それにこだわらない。 友達とけんかをしても, くよくよと悩まない。
肯定的期待 (5項目) 困難な課題を課されても, なんとかかなると思う。 何か失敗をしても, 最後にはうまくやることができると思う。 何か困難な出来事が起きても, 切り抜けることができると思う。 どんな課題でも, きっと成功すると思う。 うまくいくかどうか分からない時でも, 最終的にはうまくいくような気がする。
困難の不生起 (5項目) 自分の生命が失われる出来事に出会うとは思わない。 自分は犯罪に巻き込まれないと思っている。 友達が自分をおとしいれることはないと思う。 滅多にないような悪いことは自分には起きないと思う。 他者に裏切られることはないだろう。
運の強さ (4項目) じゃんけんにはいつも勝てると思う。 自分はじゃんけんをすると負けたくないような気がする。 くじ引きにあたることが多い。 自分は運が悪い方ではないと思う。

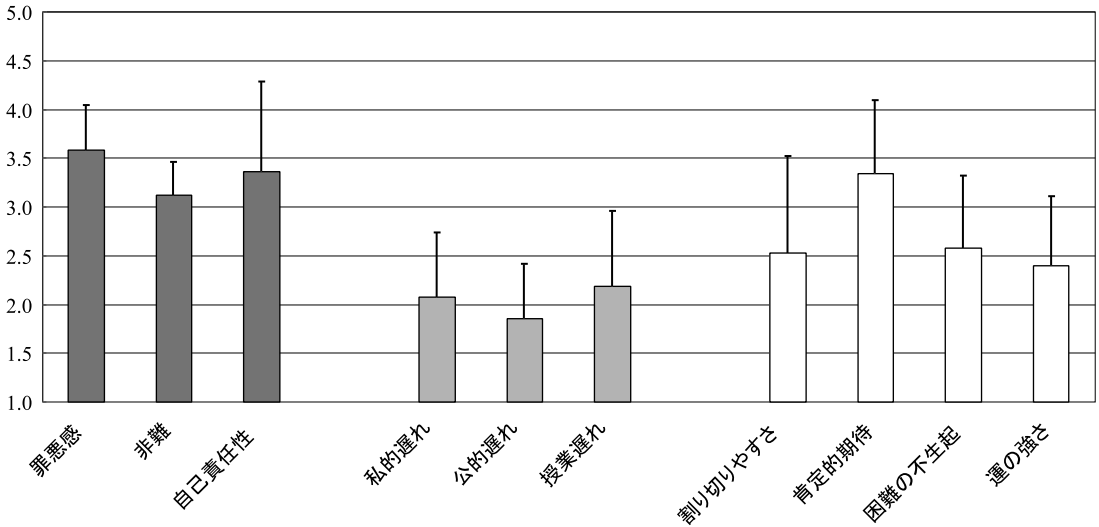


Figure 1 VODKA2005, 主観的遅れ頻度, MOAI-4 の下位尺度の平均値および標準偏差 (バー)。

Table 4 実際の遅れ頻度尺度の平均値および他の尺度との相関

		遅刻回数	遅刻・欠席回数	遅刻時間	遅刻・欠席時間
平均値		0.25	0.88	9.14	204.86
標準偏差		0.62	1.51	27.09	258.82
VODKA	罪悪感	-.101	-.178	-.078	-.231 *
	非難	-.052	-.062	.044	-.086
	自己責任性	.138	-.024	.102	-.029
遅れ頻度	私的遅れ	.285 **	.288 **	.188	.200 *
	公的遅れ	.080	.175	.072	.177
	授業遅れ	.395 **	.457 **	.300 **	.419 **
MOAI	割り切りやすさ	.190	.288 **	.171	.209 *
	肯定的期待	.058	.125	.002	.010
	困難の不生起	.106	.021	.126	.016
	運の強さ	.014	.132	.001	.102

* $p < .05$ ** $p < .01$

に有意な相関は認められなかった。

実際の遅れ生起頻度と MOAI-4 との相関

遅刻回数, 遅刻・欠席回数, 遅刻時間, 遅刻・欠席時間の4つの測度と MOAI-4 の4つの下位尺度との相関係数をそれぞれ算出した (Table 4)。割り切りやすさと遅刻・欠席回数 ($r = .288$, $p <$

.01), 遅刻・欠席時間 ($r = .209$, $p < .05$) との間
に有意な正の相関が認められた。

考 察

以上の結果から, 遅れに対する態度のうち, 実際の遅れ生起と相関が認められたのは, 自分の遅

れに対する罪悪感のみであった。すなわち、自分の遅れに対する罪悪感が高いほど、遅刻・欠席時間が少ないことが示された。自分の遅れに対する罪悪感が、欠席についても考慮した遅刻・欠席時間と相関を示し、欠席については無視した遅刻時間とは明確な相関を示さなかったことは、こうした態度が単に遅れることのみならず、いわゆる“授業の出席態度”と関連していることを示唆している。一方で遅れの自己責任性については、実際の遅れ生起頻度とは明確な相関を示さなかった。このことは、授業時間に生起する遅刻は、責任感よりも、罪悪感によって制御されていることを示唆する。さらに進めて考えるならば、授業場面での遅刻に際して感じる罪悪感、個人の授業観や、担当教員との関係性によっても左右されると想定される。今後こうした授業場面での教師－生徒関係をも含めた分析を行っていくことが有益であると予想される。

また、楽観性の下位尺度である割り切りやすさに関しても、自分の遅れに対する罪悪感と同様、欠席については無視した遅刻時間や遅刻回数とは明確な相関を示していないが、遅刻・欠席回数や遅刻・欠席時間とは相関を示している。割り切りやすさに関して言えば、遅刻回数や遅刻時間とは明確な相関を示さなかったことは、割り切りのよい調査参加者は、“遅刻”しそうになった際に“休んでしまえ”と割り切ることによって、遅刻自体を回避している可能性もある。

また、実際の遅れ生起頻度は、主観的な遅れ頻度とも相関を示している。このことは、主観的な遅れ頻度評定の妥当性を示す結果であると捉えることができる。一方で、実際の授業での遅れ生起頻度が、私的遅れとは相関を示したものの、公的遅れとは明確な相関を示さなかったことは、調査参加者にとっての授業が、あくまでも私的なイベントであり、公的なイベントとしては捉えられていない可能性を示唆する。今後、授業観に関する調査、検討を加えながら、さらなる吟味を行っていくことが求められる。

付記：本研究で分析されたデータのうち、VODKA2005、主観的遅れ頻度尺度、MOAI-4に関わるデータは、東海心理学会第45回総会（安藤・川上、2006；川上・安藤、2006）において報告されたデータの一部である。また本研究は平成18年度大阪樟蔭女子大学特別研究助成費の交付を受けた。

引用文献

- 安藤史高・川上正浩（2001）．期限つき課題の遂行について（6）－遅れに対する態度と遅れ頻度との関連－東海心理学会第50回大会発表論文集，57．
- 安藤史高・川上正浩（2002）．期限付き課題の遂行について（7）－遅れに対する態度と楽観性との関連－東海心理学会第51回大会発表論文集，40．
- 安藤史高・川上正浩（2004）．期限付き課題の遂行について（9）－予定時刻課題における自由記述データの分析（1）－東海心理学会第53回大会発表論文集，40．
- 安藤史高・川上正浩（2005）．期限付き課題の遂行について（11）－予定時刻課題における自由記述データの分析（3）－東海心理学会第54回大会発表論文集，46．
- 安藤史高・川上正浩（2006）．期限付き課題の遂行について（12）－VODKA2005作成の試み（1）－東海心理学会第55回大会発表論文集，49．
- 川上正浩・安藤史高（2001）．期限つき課題の遂行について（5）－遅れに対する態度尺度の検討－東海心理学会第50回大会発表論文集，56．
- 川上正浩・安藤史高（2002）．期限付き課題の遂行について（8）－予定時刻課題の検討－東海心理学会第51回大会発表論文集，41．
- 川上正浩・安藤史高（2005）．期限付き課題の遂行について（10）－予定時刻課題における自由記述データの分析（2）－東海心理学会第54回大会発表論文集，45．
- 川上正浩・安藤史高（2006）．期限付き課題の遂行について（13）－VODKA2005作成の試み（2）－東海心理学会第55回大会発表論文集，50．
- 川上正浩・川野健治（1992）．期限つき課題の遂行について－課題の認知と予定のシフト－日本教育心理学会第34回総会発表論文集，285．
- 川上正浩・川野健治（1994）．期限付き課題の遂行につ

- いて (3) 日本教育心理学会第 36 回総会発表論文集, 209.
- 川野健治・川上正浩 (1993). 期限つき課題の遂行について (2) 日本教育心理学会第 35 回総会発表論文集, 326.
- 川野健治・川上正浩 (1995). 期限つき課題の遂行について (4) 日本教育心理学会第 37 回総会発表論文集, 614.
- 中西良文・小平英志・安藤史高 (2001). MOAI-4 (多面的楽観性尺度 4 下位尺度版) 作成の試み - 確認的因子分析による検討 - 東海心理学会第 50 回大会発表論文集, 23.

The Relationships between View on Delay and Actual Delay Occurrence

Osaka Shoin Women's University
Masahiro KAWAKAMI

ABSTRACT

The purpose of the present study was to examine the relationships between view on delay and the occurrence of being late for class at university. The target class was a required subject of first grade students of psychology department in spring semester, View on delay (VODKA2005), subjective delay occurrence frequency, and optimism (MOAI-4) were measured by the questionnaire at the first class of the semester with 103 participants. The number of times a participant has been late for class, the time a participant has been late for class, and the absence were checked for each participant. After the class ended, the relationships between the view on delay and the number of times a participant has been late for class, the time a participant has been late for class, subjective delay occurrence frequency, and optimism were examined. It was shown that the occurrence frequency of late and absence in the class scene related to the guilt to own delay by the analysis based on the correlation coefficient.

Keywords: delay, attitude, occurrence of delay, VODKA2005, optimism